



Title	「私たち」という感覚を育むために：哲学カフェとシティズンシップ
Author(s)	三浦, 隆宏
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 3-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51594
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「私たち」という感覚を育むために ——哲学カフェとシティズンシップ

三浦 隆宏

2003年に「席をもうけるということ——アーレント政治理論と哲学カフェ」と題する論稿を書いたとき、私の哲学カフェの経験数は、せいぜい4、5回程度であった。「哲学カフェ」というパリティで自然発生的に始まった営みをこの国で行なってゆくにあたり、いわばその理論的な視角を求めて、この対話実践をハンナ・アーレントのいう「活動 action」のひとつの具体例として捉えることが、そこでの主要な目的であった。その後、10年以上にわたり、さまざまな場所で私はこの営みに関わりつづけてきたが、哲学カフェについて論じるということは（求められて書きたいいくつかの文章を除き）してこなかった。

本稿は、旧稿を発表してから現在までに私自身が企画・進行をしたり、あるいは参加者として加わった数々の哲学カフェの経験（たぶん、その数は200を超えるだろう）を踏まえ、この対話活動にかんするいくつかの論点を（再）確認するとともに、その意義を「シティズンシップ（教育）」という観点から言語化することを主な目的としている。

アーレントは、物語ることの重要性を繰り返し説きつづけた思想家でもあった。「言葉や行ない、出来事」は、「人間の手になるすべてのもののうちで最も儂いもの the most futile である」。よって、それらは「ゆくゆくは文字へと移し換える」ことによって、「心の記憶を外化し、いわば物化 reify」しなければならない¹、そう彼女は主張する。これは、活動と言論と思考が「それ自体ではなにも『生産』せず、生まれ、生命そのものと同じように儂いものである」²からにはほかならない。したがって「それらが、世界の物となり、偉業、事実、出来事、思想あるいは観念の様式になるためには、まず聞かれ、記憶され、ついで変形され、いわば物化されて、詩の言葉、書かれたページや印刷された本、絵画や彫刻、あらゆる種類の記録、文書、記念碑など、要するに物にならなければならないのである」³。

以下の本論で試みたいのは、まずはこの「物化」、すなわちさまざまな哲学カフェの場で私が経験した「言葉や行ない」を「文字へと移し換え」てゆくことである。あわせて私がこの数年で見聞きした、いま全国各地で進みつつある〈カフェ〉文化の動向をとりまとめるとともに、その理由についても考察する。

1 哲学カフェとサイエンスカフェの違い

2014年に刊行された『哲学カフェのつくりかた』の第2部が、「哲学カフェいろいろ」と題されたうえで、書評カフェやミルトーク、シネマ哲学カフェにメディカルカフェと、さまざまな対話の模様を紹介していることからわかるように、この10年で一口に「哲学カフェ」といっても、そこには多様なカタチがありうるということが明らかになってきた。私自身がじっさいに経験したわけではないけれど、「認知症の人や家族が集まって悩みを相談したり、介護の情報を得たりする『認知症カフェ』が、広がっている」と伝える記事⁴や、また「吃音者の自助団体『名古屋言友会』が就活中の仲間同士、悩みを語り合おうと初めて開催」した「吃音カフェ」を紹介する記事⁵を目にしたこともある。このように多様な姿を見せつつも、〈カフェ〉というくつろいだ雰囲気、あるテーマについて参加者どうして語り合うという点は共通していると、とりあえずは言っておいていだろう。認知症カフェであれば、「コーヒー代三百円で認知症の人や家族に限らず、介護を終えた人や介護職、医療職、認知症を知りたい人など誰でも参加できる」とのことであり、「必ずしも認知症にとらわれず、いろいろな地域の課題を語り合う場になれば」(強調は引用者)というのが主催者側の思いのようである⁶。

このようにこの10年余りで多種多様な〈カフェ〉が開かれるようになったわけであるが(そして、その理由については第4節で考えたいが)、その間、哲学カフェと同様に継続して取り組まれてきたものとして「サイエンスカフェ」の名を挙げることができる。この営みについては、朝日新聞が2013年6月21日から24日にわたって「サイエンスカフェをはじめよう」と題する小さなコラム記事を連載していたので、少し参照してみよう。両者に違いはあるのだろうか？

記事によると、サイエンスカフェもやはり「くつろいだ雰囲気科学を語り合う催し」であり、「1990年代後半に欧州で根つき、いま国内でも広まりつつある」とのことである⁷。イギリス発祥で、フランスの哲学カフェにヒントを得て、97年から98年ごろに始まったとのことなので、ある意味「哲学カフェ」と「サイエンスカフェ」はきょうだいのような関係にあると言えるのかもしれない。サイエンスカフェの先駆者ダンカン・ダラスが、「サイエンスカフェは、対等で打ち解けた雰囲気の議論を促そうという発想に立つ。聴き手と語り手とは互いに尊敬し合う関係」と強調することからもそれはわかる。

もっとも、日本で広まっているサイエンスカフェが、ダラスの言うようなものとなりえ

ているかはやや疑問があるとも言えそうで、たとえば科学史・科学論を専門とする米本昌平は、「研究者が人々を啓蒙する場、自分の研究を広める場としてとらえられていないか。科学は批評されてこそ鍛えられるのに、その視点が弱い」と述べ、また科学技術社会論が専門の平川秀幸は、「日本では、カフェは専門家の話が専門外の人々によく伝われば成功と考えがち。でも本来は、専門外の人が専門家とは違う見方を示すことに意味がある」と語っている⁸。サイエンスの場合、哲学とは違って素人が専門家に対してなかなか疑問を呈しにくいという事情がそこにはあるのかもしれない。よって、日本のサイエンスカフェは、専門家による「アウトリーチ」活動の域にとどまっているようにも見える。「教える、教えられるという関係をいかに崩せるかだ」と平川が同じ紙面で述べているが、これは哲学カフェにおいても肝に銘じておくべきことであろう。「哲学カフェでは、全員が先生で全員が生徒」⁹なのであって、「無知の知」を共有する者どうし、対等の関係でなければならぬのだから。

2 アクティブ・ラーニングとしての哲学カフェ？¹⁰

さてこの10年というより、ここ1、2年でよく目にするようになってきたものとして、「学内での哲学カフェの実践」を挙げることができる。筑波大学人文社会科学研究科哲学・思想専攻が主催する「ソクラテス・サンバ・カフェ」¹¹や高千穂大学で開かれている「パイディア哲学カフェ@すぎなみ」¹²、あるいは大谷大学哲学カフェなどである。福岡大学でも「マンガ de 哲学」という試みが最近始まったと聞く。そこにはどういう事情があるのだろうか。

教員からの一方向的な講義形式の授業ではなく、学生の能動的な学習への関与を組み込んだ授業法としての「アクティブ・ラーニング」¹³の必要性が現在声高に叫ばれているのはよく知られているだろう。とはいえ、通常の「哲学」の授業、特に哲学を専門としない学生たちが対象のそれにおいては、大教室での一方通行的な授業のイメージが依然強いであろうし、また実際そうなりがちであるようにも思われる。しかし、哲学とはそもそも教室の中で、しかも座って学ばれるものなのだろうか。

哲学の祖とされるソクラテスが、アテネの市民たちと哲学的な問答に明け暮れていたのは、アゴラと呼ばれる広場であった。アリストテレスの学派が「ペリパトス（逍遙）学派」とも呼ばれていたのは、彼の開いた学園「リュケイオンの遊歩道ペリパトスを往き来しながら議論す

ることを、アリストテレスが好んだからであるといわれる」¹⁴。その意味で、本来の哲学の風景とは、教室の外で学生たちと対話を行ないながら哲学することにほかならないのではないか。

教室の中で哲学を学ぶのではなく、教室の外で哲学することを学ぶ場、つまりは学生たちが主体的にものごとを考えだすきっかけとなる場として、「哲学カフェ」という営みが使えるのではないか——こういう思いが、学内で哲学カフェを実践しだした教員・学生らには共通してあるように見受けられるのだ

私自身、「ケースメソッド」という3、4年生対象の演習系の授業において、「公共的な対話技法の実践」という名称で2年間にわたり、学内での哲学カフェを行なってきた。これは、学生ラウンジ（下の写真を参照）での哲学カフェの回と演習室で行なう振り返りの回とを1セットにして進めていくという形式である。テーマとしては「女子大のメリット、デメリットとは？」、「理想的な人付き合いとは？」、「人びとがいま求めているもの（欲しているもの）とは？」、「いま求められるリーダーとは？」、「女性の幸せとは？」、「友人とは何か？」、「良い印象を与えるには？」などが挙げられる。授業ではあるが〈カフェ〉なので飲食はOKとした。



学内での哲学カフェ

うれしかったのは、2回目のカフェの感想としてある4年生の受講者が、「就活前にこのケースメソッドを受講していたかったです。選考ではグループディスカッション、グループワークといった見知らぬ人同士で話しあわなければいけない時があります。哲学カフェは、就職活動で非常に役に立つと思います」と書いてくれたことである。たしかにたとえおなじ学部で学ぶ同性どうしであっても、日頃からおしゃべりをしたりする仲でない人たちに向かって、自分の意見を述べるのは案外難しいものだろう。人前で話すという、少なくとも数の学生が苦手としていることを克服するひとつのきっかけとして哲学カフェは使えるのではないか、そういう手ごたえを開始早々手に入れることができた。

また、別の受講者は期末レポートにおいて、「大学に入ってから、先生の話や講義が多く、話し合いという機会があまりなくなりました。このケースメソッドはテーマにあわせてたくさんの人の意見が聴けて、自分の意見に対して意見をくれる人もいるのでとても勉強になったし、とても楽しかった」と書いていた。哲学カフェでは、教師である私は「進行役」という立場にあり、問いかけをしたり、話の交通整理は行なうものの、そこでの対話を産み出してゆくのはあくまでも受講生一人ひとりに委ねられている。率先して発言するのがやや苦手な学生でも、他の学生たちの意見を聴くことによって多くのことを学べる、そういう学生どうしの相互的な学び合いの要素もまた哲学カフェにはあることを、この言葉は示しているように思われた。

もっとも、肯定的な感想ばかりというわけでもない。たとえば、私が担当する「哲学」の授業を前年度に受けたうえでケースメソッドを受講した学生二人には、「哲学カフェで行なわれていることが授業での哲学とは全然違っていて驚いた」と言われたものである。たしかに私は講義としての「哲学」においては、あるテーマを設定したうえで、アリストテレスやデカルト、ライプニッツにカント……といった哲学者の考えを説明するというやり方を取っているのであり、それに馴染んでいた学生からしたら、哲学カフェでなされている、その場に出された意見から考えていこう、人びととの対話の中から哲学的な知見をくみ上げていこうとするやり方は、思考の方向性が違うものとして映るのかもしれない。

あるいは、「なぜ雨の日だと嫌な気持ちになるのか」とか「なぜ髪を染めるのか?」といったテーマでなされた対話を指して、ある学生に「雑談にしか見えない。哲学とはもっと掘り下げていくものであるのに、それがなされていない」と言われたこともある。このあたりも、「哲学カフェ」という名のもとで「公共的な(カフェでの)対話」と「哲学」という相容れない二つの営みを同居させていることの矛盾を、はからずも指摘したものとして

強く印象に残っている。

3 進行役とはどういう存在か¹⁵

ここで進行役の側から見た二つの哲学カフェの様子を見てみよう。いずれも名古屋大学理学部内のクレイグスカフェで行なわれたものである。

1) 「哲学教育の意義とは？」(2012年9月18日)

はじめに年輩の男性が、「そもそも哲学がどういう意味なのかを定義しないことには、哲学教育について話しようがない」と言われ、そこから各々の参加者が「哲学」をどう捉えているのかを聞くことから始めることになった。いわば、テーマの前段から話が始まったわけだ。これは、哲学カフェにおいてはよくあることである。そして、今回の案内文のなかにあった「哲学を専門としない学生に哲学を教える意義、哲学を専門としない学生が哲学を学ぶ意義」という文章において、すでに二種類の哲学が区別されて用いられているという指摘から、その「二つの哲学」とはどのようなもので、また両者はどう違うのかについての議論で大きく時間がとられ、結局、一時間半の時間内では「哲学教育」という主題にまで辿りつくことができなかった。



クレイグスカフェでの哲学カフェ

進行役として苦しかったのは、最初に口火を切られた年輩の参加者が、妙に上から目線な物言いをされる方で、たとえば参加者の発言内容を私がまとめていると、「そういうふうに捉えるわけね」と言われたり、なかなか他の参加者と対等な立場では発言なさろうとせず、その点を気にしながらの進行となった点である。「議論があちこちしてしまって、すっきりしなかった」、「哲学と教育についての共通理解になかなか近づけなかった」、「参加者に依存しすぎた作り（進行）なので、結局何が言いたいのか、まとまった見解が得られなかった」という参加者アンケートの言葉が示すように、隔靴搔痒の思いが残るカフェになったように思う。

後日、参加してくれたある研究者に、「三浦さんは10年以上も進行役をしているのに、あたかも初めての進行かのように見せるところがすごい」と言われてしまったが、そのように映ったのもなるほどその通りかもしれない。その実、私は哲学カフェのあいだずっと立ちっぱなしだったのだが、これはある意味、発言者に対して正対しすぎているのである。もちろん、正対するのが一概に悪いわけではないけれど、これでは参加者の発言に対して常に私が受け答えをするというかたちになってしまい、なかなか参加者どうしの対話にはなりにくいだろう。大阪での一般市民の方々との哲学カフェにはある程度の慣れを感じていたのであるが、今回は名古屋での最初の、しかも知り合いの（哲学カフェに興味関心をもっている）研究者らがいる環境でもあったためか、私の中にへんな気負いがあったのはやはり否めない。

2) 「教養科目の『哲学』で学生は何を学んだらよいのか？」(2012年12月21日)

前回のよう自由口火を切らせる進行ではなく、最初にこちらから、教養科目の哲学を担当したことがある、あるいは現にいま担当している参加者に、発言を促すことで進行を開始した。そして、若い非常勤講師ほど概論の授業であろうとテーマを設定して、学生の関心を引く授業をしていることがわかると、それに対して、「哲学科の専任教員の先生は一般教養の授業であろうと古代ギリシア思想に特化した話しかしなかった」という意見も出てきて、会場に笑いが起きる。さらにアメリカで哲学を学んだ参加者からは、アメリカでの哲学の授業内容にかんする発言も出てきた。それらの意見から、「哲学はある程度の人生経験を積んでからのほうが、動機をもって学ぶことができる」という話の流れができつつあるなど思いながら進行をしていると、「哲学はまったく知らない」と前置きをしたある女性が、イギリスでの小学校教育についての見聞をもとにした発言をされる。イギリスでは小学校の頃から哲学的な問いを子どもたちに考えさせる授業があるというのだ。

そこで、たしかに哲学的なことを考えるうえで〈子ども〉であることの重要性がよく言われますよねという、それまでとは逆の話の流れが形成される。「その意味で、大学1、2年の教養課程の期間というのは、受験勉強で子どもの頃のような知的好奇心を失い、さらにはまだ人生経験もあまり豊富ではないという、哲学を主体的に学ぶうえでかなり条件の悪い時期に当たるのではないか」ということを確認して、一時間半のカフェを終えることとなった。「みんなの意見を反映させたい会話ができた」、「みんなの考え、意見が聴けて非常に新鮮でおもしろかった」、「自分とは違う視点からの意見がきける所が面白いと感じた」などの感想からも、この回の哲学カフェは参加者の満足度がわりと高かったのではないかと思われる。

さて、以上の二つを踏まえたうえで、哲学カフェの進行とはどういうものなのかについてあらためて考えてみたい¹⁶。進行役のことをファシリテーターと呼んだりすることからもわかるように、進行とは参加者どうしの対話を促進させることである。それではどのような促進の仕方があるのだろうか。ひとつは2)のときのように、進行役がある程度イニシアティブをとって道筋を作り、そこに参加者の発言を絡めていくというやり方がある。たとえば、非常勤講師の経験者や一般教養の「哲学」を受講したことのある人たちに「具体的にそれはどういう授業であったのか」を訊いてみる。つまり、具体例を複数の参加者から挙げてもらいながら、その間に新たな論点を探しだしたり、そこからの議論のもっていきかたを模索したりするわけである。研究者ならいざ知らず、一般市民の参加者は、それほど「哲学的な議論」をしたがっているわけでもあるまい。むしろ、あるテーマについて他の人びとがどう考えているのかを知りたいと思って参加する人のほうが多いのではないか。ゆえに、具体例からうまい具合に話の道筋を作っていくことがたとえできなくても、参加者からさまざまな具体的発言を引き出すことができれば、それほど対話の場が大崩れすることもない。いくつかの具体的な言葉を踏まえ、抽象的に議論の段階を引っ張り上げようとし、それが難しいと感じるや、再び新たな論点に対して参加者から具体的な発言を求める。これらの一連の流れをさりげなく行うことを最近の私は心がけている。

このようにある程度介入する進行方法を認めたとうえで、とはいえ、それとは異なる対話の促進の仕方もあるのではないか。それは1)の私が期せずしてそうしてしまったように、無理に進行をしようとしな(あるいはうまく進行ができない)ことで、参加者たち自身での対話の促進を(結果として)図るというやり方である。

その場にたまたま集まった人びとの自主的な発言に委ねられる哲学カフェにおいては、

即興性の度合いがとても高い。ゆえに、進行役としては思いもよらない方向に話が進んでゆき、文字通り途方に暮れてしまう、そんな場面に出くわすときが多々ある。しかし、進行役としての役目がうまく果たせず、進行役自身があたふたしているとき、参加者たちはそれまでのように進行役に進行を一任するのではなく、自分たち自身で対話の舵取りをしようという動きを見せはじめる場合があるのだ。あくまでも結果オーライにすぎないと言われればそれまでだが、しかしこういう参加者を巻き込む対話の促進方法もまたひとつのやり方なのではないか。そして、この後者の場合であれば、なにも哲学カフェの進行役は哲学をある程度勉強した人である必要もないということにもなるだろう。

こういう思いを抱いているため、たとえば学内での哲学カフェにおいても、私は何度か学生たちに進行役をさせたことがある。そうすると、参加者側の学生たちからは、「先生が進行役だと先生がなんとかするだろうという安心感があるのですが、学生が進行役だと沈黙などが生じたとき、なんとかしてあげたいという気持ちが芽生え、いつもより発言していました」という感想や、「先生が進行を務める哲学カフェとは違ったものがあったように感じた。それは進行役と参加者が協力しようという姿勢があったからだと思われる」といった感想が聞かれたりもした。

では、哲学カフェの進行経験によってひとはどのようなことを身につけることができるのだろうか。この点についても少し展望を記しておこう。『臨床知と徴候知』の序論「人間の生の『知』——臨床知と徴候知」において、編者の一人である後藤正英が、「相手（他者）の出方によって触発されることで働きだす受動的知であるという点では、徴候知と臨床知は同じものであるといえるだろう」¹⁷と述べている。徴候知とは、精神科医の中井久夫や歴史家のカルロ・ギンズブルグによって発見された概念で、「本質的に受動的な認知の形態」¹⁸をとり、「相手の出方が容易には予測できず、不意打ちがありうるような状況で働く認知の在り方」¹⁹を指すという。先の1)での対話からも明らかのように、哲学カフェにおいて進行役は、受動＝受苦的な立場に身を置くことが頻繁に起こる。いわば、「耳をそばだてて周囲の気配に細心の注意を払っている状態、あるいは、何かが起こる予兆を感知すべく身構えている状態」²⁰に置かれつづけるのが、進行役だとも言えるのである。中井自身は〈徴候知〉として、医学の知や戦争術を、そしてギンズブルグは「徴候知という推論的パラダイムに注目した」²¹人物として、モレッリやフロイト、シャーロック・ホームズらを挙げているとのことであるが、哲学カフェの進行経験も、徴候知＝臨床知を涵養するためのひとつのトレーニングとして位置づけられるのではないか、そういう予感をいま

の私は抱いている²²。

4 カフェという〈第三の場〉

第1節においても触れたように、現在「〇〇カフェ」という場が花盛りの観を呈している。最近も毎日新聞が、『オシャレでカッコよく憲法を考える』をモットーに『憲法カフェ』を展開する²³ 女性弁護士がいることや、「がん哲学外来 メディカル・カフェ」が関西各地で開かれるようになってきている²⁴ ことを伝えていた。

しかし、「カフェ」と名のつく対話の場がこれほど流行るとは10年ほど前には正直予想できなかった。「カフェから革命が始まったパリやウイーンならわかる」が、「そんな伝統の雫さえないわが国のやかましい喫茶店で、『愛』だの『暴力』だの議論してもまるで実情に合わないじゃないか²⁵ とさえ言われたりもしたからである。では、なぜこの国でこれほど〈カフェ〉という場での対話が人びとに受け容れられたのだろうか。

高井尚之が『カフェと日本人』の冒頭で述べるところによると、スターバックスが日本に一号店をオープンさせたのは1996年8月のことであり、「以来、店舗を増やし続け、二〇一三年で国内の店舗数は一〇〇〇店を超えた²⁶ とのことである。なので、この20年弱で「外資系カフェ」そのものが私たちの日々の生活にとってなくてはならないインフラになったということは言えそうだ²⁷（哲学カフェもその意味で外資系カフェであると言ってよい）。そして、『カフェと日本人』の本文はこう閉じられている。

現在、「カフェ」という言葉は、店だけを示すものではなく、交流場所のような意味でも頻繁に使われる。「××カフェ」と呼ぶシンポジウムやトークショーがその一例だが、今後は、より一層そうした用い方がされるはず。それとともに交流の仕方も多様化するだろう。／二一世紀の日本で暮らす生活者（日本人に限らない）にとって、もはやカフェは「人と場所の代名詞」なのだ²⁸。

人びとの交流場所としての〈カフェ〉の特徴を明らかにするために、ここでカフェとは異なるタイプの対話の場を参照してみよう。たとえば、討論型世論調査（Deliberative Poll）やコンセンサス会議、タウンミーティングといった市民参加型のイベントである。

「討論型世論調査は1994年にイギリスのマンチェスター大学で、『犯罪』をテーマに行

なわれたのが最初」²⁹で、「日本での最初の実施（神奈川県『道州制』討論型世論調査）は2009年」³⁰とのことである。この調査は、「①通常の世論調査と②討論フォーラムの二つから構成され」³¹、討論フォーラムの「最も基本的な形態」は、「金曜日の夕方に集まり、日曜日の午後に解散する（2泊3日）」と記されている。もっとも、「短縮版として、1泊2日で行なったり、1日終日で行なったりする方法もある」³²。「討論型」と訳されている deliberative が「熟慮した」という意味であることから、この営みが「思い込み、思い付き、誰かの受け売りの答えではなく、その問題を学び考え話しあったうえでの成熟した意見を探る」³³ことを狙いとしているのは容易に見取れるだろう。

いっぽうコンセンサス会議は、「デンマークで開発された、市民参加型のテクノロジー・アセスメント手法の一つ」³⁴であり、「市民パネルには最低でも土曜日を三回犠牲にして、この会議に出席してもらわなければならない」³⁵とされている。「具体的な科学技術に関して、専門家ではない人、ふつうの人、つまり素人が主導権を握り、討議する」³⁶という点は、第1節でも見た日本でのサイエンスカフェの現状——それは専門家が素人である市民を啓蒙するという側面が強かった——からすると興味ぶかい特徴を有していると言える。

ここで問うてみたいのは、これらの「熟議 deliberation」タイプの対話の場は、一般市民の目からすれば敷居が高すぎるように映るのではないかと、ということである。小林傳司が「一般市民から見れば NGO や NPO のメンバーは、公共的な活動や議論に積極的に参加している点で、『プロ』市民のように感じられるかもしれない」³⁷と述べているように、たとえばキムリッカのいう「公共的な討論に参加する能動的な市民」³⁸を私たち一般市民に期待するのはやや酷なことなのではないか。たとえば篠原一が、「現代においては社会の規模の大きさ、問題の複雑さ、マスコミの操作性などを考えると、完全な判断のできる市民を期待することは困難である」³⁹と述べたうえで、「民主社会においては、『それなりに良い市民（グッド・イナフ・シティズン）』がふえていけばよいのであって、完全な市民というイメージを想定したら、市民などは存在しなくなってしまう」と懸念しているように、私たちはむしろロバート・ダールのいう「それなりの市民（アデクウェイト・シティズン）」というあり方に目を向けてみてはどうだろう。そして、哲学カフェなどの対話の場は、そういったそれなりの市民でも気軽に立ち寄れる（＝間口の広い）公共的な対話の場として位置づけることができるのではないかと思うのである。

「家庭でもなく、職場でもない、第三の居場所」⁴⁰を指して、社会学者のオルデンバーグが「サードプレイス」という概念を提出し、そこを「インフォーマルな公共の集いの場」⁴¹

と呼んでいるが、今世紀に入ってから急激に増えていくことになった「○○カフェ」という対話の場は、この〈第三の場〉、すなわち（私たちの言葉でいうところの）間口の広い公共的な対話の場の一例にほかならないであろう。オルデンバーグは、サードプレイスを「民主主義的政治プロセスにとって必要不可欠」⁴²とも述べているが、ではこの場がもつ政治的な意義とははたしてどういうものなのか。

5 哲学カフェの政治的な意義

「課題先進国」という言葉がある。元東大総長の小宮山宏が、「エネルギーや資源の欠乏、環境汚染、ヒートアイランド現象、廃棄物処理、高齢化と少子化、都市の過密と地方の過疎の問題、教育問題、公財政問題、農業問題など、解決しなければならない課題」⁴³が現在の日本には山積しているが、これらの問題は遅かれ早かれ世界中の国々が抱えることになると予測されるわけで、その意味で日本は「世界全体の課題を先取りしている」⁴⁴、つまりは「課題山積の先進国」⁴⁵であるとして名づけた言葉である。

あるいは「日本症候群 Japan Syndrome」という言葉。イギリスの雑誌『Economist』で日本特集が組まれたさいに用いられたもので、そこでは「日本が抱える問題の本質は他でもなく高齢化と人口減少にあり、それをいかに克服していくかが日本にとっての課題であり、しかもこの問題は世界各国が日本を追いかけるようにして直面していく問題なので、日本がそれにどう対応していくかは日本だけの問題にとどまらず、世界が注目しているという趣旨の議論が展開されていた」⁴⁶と広井良典が伝えている。

これらの課題は、専門家でも正解というものを出すことができないものであり、よって私たち一人ひとりが取り組んでゆくしかない「私たち」全員の課題であると言ってもよいはずだ。しかし、これらの課題を、「私たち」の問題と思うことのできるひとが現在どれほどいるだろう。先般の衆院選当日の社説には、『「私たち」はほどけて『私』になり、ある部分は政治的無関心へ、ある部分は固くて狭い『日本人』という感覚にひかれてゆき、気がつけば、この社会にはさまざまな分断線が引かれるようになった」、「被災地の復興にせよ、社会保障にせよ、『私たち』の感覚が失われた社会では、誰かに負担を押しつけることはできても、分かち合うことはできない」⁴⁷と記されていた。

『「私」の中に『私たち』という感覚を育むこと』——、社説においては選挙がその一つのきっかけとされていたのであるが、哲学カフェにおいても同様のことが期待できるので

はないか。その理由は以下のようなものである。

前節で〈第三の場〉、すなわち〈間口の広い公共的な対話の場〉として位置づけた哲学カフェ⁴⁸においては、いかにも哲学的というテーマよりは、「人はなぜつながりを求めるのか？」とか「相手を思いやるとは？」など、私たちが日頃の生活において一度は疑問に思ったことがあるような、そんな身近なテーマが選ばれることが多い⁴⁹。そして第1節でも引いたように「全員が先生で、全員が生徒」という対等な関係において⁵⁰、話し手自身がよく掴めていない考えや意見を、「それはこういうことですか？」と（進行役も含めた）聞き手が整理し直す、そういう助け合いの精神でこの場での対話は進んでいくことが多々ある。また、第2節や第3節においても述べておいたように、進行役に対話の整理をお任せできない（押しつけることができない）状況下において、参加者は進行役と協力して、あるいは進行役を助けようと対話を進めていくこともある。その場にいる者全員で対話を動かしている（分かち合っている）という対話体とも呼べるような雰囲気を見せることがしばしば起こるのである。

さらには、この10年余りの実践から気づかされたことのひとつとして、自らは進んで発言せずとも、ただその場に居合わせるということに価値を置く参加者の方々がいること、すなわち「自分の意見を言いに来る」のではなく、むしろ「他の人びとの意見を聴きに来る」ことに哲学カフェ（などの公共的な対話の場）の意義を認めている人たちが一定数おられるということを挙げるができる。社会学者グラノヴェターのいう「弱い紐帯 Weak Ties」を、玄田有史が「自分と異なる日常に生きる人々との遭遇機会」⁵¹とも言い換えていたが、また『サードプレイス』の解説において、モラスキーが「サードプレイスは日常生活において個人的な関係をもたないような相手と友好的な交流をもつ機会を与えてくれる場所である。居心地のよい場所のなかで、様々な〈他者〉と好意的な関係を築くことによって、常連客一人ひとりの視野が広がり、より寛容な社会へと結ばれていく」⁵²と述べていたが、哲学カフェの場においてはアーレントのいう（そして旧稿においてはそこに照準を合わせていた）「活動するひと actor」でなくとも、その場に身を置いている参加者の言葉を聞くことによって、すなわち「観客 spectator」⁵³の立場で関わることによって、「私的感覚から区別されるものとしての共同体感覚」⁵⁴——すなわち「私たち」の感覚を育むことが期待できるのではないかと思うのである。（ちなみに彼女は「共通感覚の妥当性は人びととのつきあいのうちから生まれる」⁵⁵、「判断力の可能性の前提は、他の人びとの存在であり公共空間である」⁵⁶とも述べていた。）

6 場が育つということ

本稿を閉じるにあたって、ここ2年余りの名古屋での哲学カフェの活動について振り返っておこう。そのことで、哲学カフェを維持する力とは何かについて最後にみておきたい。

名古屋で哲学カフェを最初に行なったのは、2012年の9月。第3節で対話の様様を紹介した「哲学教育の意義とは？」であった。名古屋哲学教育研究会の主催というかたちで行なわれた名大理学部内にあるクレイグスカフェでの対話実践は、翌年の8月まで5回にわたってつづけられたが、思うように参加者が定着せず、撤退を余儀なくされる。2013年にはケースメソッドの受講者が見つめてきた猫カフェ Cats Gallery において2月、4月、6月と隔月で「猫」をテーマにした対話を行なってもみたが、こども場所がやや不便というのが難点であった。

2013年4月から始め、現在もつづいている伏見のカフェティグレ(こどもケースメソッドの受講者が自身のアルバイト先ということで紹介してくれた)は地下鉄伏見駅から徒歩1分という立地の良さもあって、ここではとにかく継続していこうと毎月開催を決めたのだが、当初は土曜日のカフェ閉店後の午後2時(伏見はビジネス街なので土曜は早々に閉店してしまう)からの2時間をいわば貸し切り状態で使わせてもらっていたものの、参加者数はせいぜいが6、7人、少ないときだと5人ほど。こういう時期が4か月ほど続いた。さすがに店側のご厚意にこのまま甘えるわけにもいかず、哲学カフェの開催時間を店の開店時間内の午前10時から11時半までに移動したのが8月。そしてある参加者からの提案で、哲学カフェ後はそのままランチを食べる時間をもうけることにした。結果的にはこれが功を奏したようで、10月以降は10人弱が集まるようになり、12月には17名にまで達した。以後もコンスタントに12、3名の方々が参加してくれている。



カフェティグレでの哲学カフェ

私にとって意外だったのは、参加者のほとんどがそのままランチ会にも参加してくれていること。私にランチ会を提案してくれた方が言うには、「哲学カフェってモヤモヤとした状態で終わることが多いじゃないですか。ランチ会はそのモヤモヤを解消させる時間でもあるんですよ」とのことだ。店側にとってもドリンク代だけでなくランチ代まで入るわけで、まさに一石二鳥。勢いそのままに2014年の4月からはJR名古屋駅西のカフェぶーれ（ここはティグレでの哲学カフェ参加者からの紹介）でも哲学カフェを開始し、毎月2回の開催を現在もなんとか維持している⁵⁷。

アーレントのいう公共空間は、「人びとが言論と活動の様式でもって共生しているところでは必ず生まれる」ものであるが、この空間は「人間の手の仕事作りあげる空間」とは違って、永続性をもたず、「活動それじたいの消滅や停止によって」容易に消え失せてしまうとされているという点に特徴があった⁵⁸。たとえば、季節ごとのイベントのようなかたちであれば、その都度対話の場を開いてゆけばいいのであろうが、それを継続して行なうというのはなかなか大変なことなのである。旧稿では「席をもうけなければならない」と書いたけれど、哲学カフェが持続してゆくためには、その「場が育たなければならない」のだ。

では、「人びとが共同で活動するとき人びとのあいだに生まれ、人びとが四散する瞬間に消えるものである」⁵⁹ 公共空間、すなわち哲学カフェに代表される〈カフェ〉での対話の場を維持してゆくにはどうしたらいいのか。この文脈においてアーレントは、「力 power は活動し語る人びとのあいだに現われる潜在的な現われの空間、つまり公的領域を存続させるものである」⁶⁰ と述べることで、独特の権力 power 論を提示しているのであるが、彼女のいうこの〈力〉——「力が発生するうえで、欠かすことのできない唯一の物質的要因は人びとの共生 the living together of people である」⁶¹ と述べるように、この概念は複数の人びとのあいだから生まれる——の内実を、最近の私はひしひしと実感している次第である。というのも、場所の紹介にしても、カフェ後のランチ会にしても、HPの管理にしても、すべて私以外の人たちがともに担ってくれているからである。

哲学カフェがこれだけ流行るようになった理由の一つは、その手軽さにある。第4節で参照した討論型世論調査やコンセンサス会議、あるいはネオ・ソクラティックダイアローグといった、考案されたり、開発されたものであるがゆえに枠組みのしっかりとした対話の場と違い、自然発生的に始まったそれには確固とした手法というものはない。したがって、それは誰もがどこでも開くことができる。哲学カフェのこの低コストでかつ不完全なあ

りようは、しかし逆説的にも、それが自己完結型のものではありえないことによって、参加者から〈受援力〉とでも呼べそうな力を引き出すことを可能にもしているのである。⁶²

*本稿は、平成26年度科学研究費補助金「公共的な対話活動の営みが果たす『シティズンシップ教育』の可能性に関する研究」(若手研究B 課題番号25870866)による研究成果の一部である。

注

- 1 Hannah Arendt, *Between Past and Future*, Penguin Books, 2006, p.44. なお、「物語る」という営為については、矢野久美子「物語る 物語る身体とアーレントのまなざし」(岡野八代編『生きる——間で育まれる生』風行社、2010年、所収)をも参照。たとえば矢野は、物語ることの意味をこう説明する。「物語ることは、人びとをつなげる役割をはたし、関係性を維持し、豊かにする。また、物語るという行為には、自己確証を与える機能がある。もっともそれには、その物語に耳をかたむけ、出来事を共有する他者が必要となる。その一方で、他者が語る物語りを「当事者」が聞き、それが救済的な機能を果たすという事例を、いくつかの物語は語ってきた。」(294頁)
- 2 Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1998, p.95.
- 3 *ibid.*
- 4 中日新聞、2013年9月5日付朝刊、26面。
- 5 中日新聞、2014年10月13日付朝刊、22面。
- 6 中日新聞、2013年9月5日付朝刊、26面。
- 7 朝日新聞、2013年6月21日付朝刊
- 8 朝日新聞、2013年6月23日付朝刊
- 9 カフェフィロ編『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会、2014年、45,52頁。
- 10 本節の記述は、2013年に開かれた第5回応用哲学会(於：南山大学)でのワークショップ「哲学を専門としない学生に、哲学の〈面白さ〉をどのように伝えるか?」において発表した「哲学カフェをもちいた授業実践」の内容をもとにしている。
- 11 <http://tetsugaku-cafe.com/>
- 12 <http://paideiatakachihphilosophy.wordpress.com/>
- 13 たとえばこの言葉は以下のような文脈で出てくる。「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授

業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見だしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」、9頁。http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf

- 14 熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ』岩波新書、2006年、101頁。
- 15 本節の記述は、以下の文章に加筆修正を加えたものである。「徴候知のトレーニングとしての哲学カフェの進行経験」、『FD・SD教育改善支援拠点の活動（2）平成24年度総合報告書』名古屋大学高等教育研究センター編、2013年、169-171頁。
- 16 哲学カフェにおける進行役の役割については、すでに旧稿の第3節「進行役の位置づけをめぐって」において、中野民夫の言葉などを引用しながら論じている。『臨床哲学』第5号、37-39頁を参照。
- 17 後藤正英・吉岡剛彦編『臨床知と徴候知』作品社、2012年、22頁。
- 18 同書、19頁。
- 19 同書、20頁。
- 20 同書、18頁。
- 21 同書、23頁。
- 22 徴候知については、鷲田清一『哲学の使い方』岩波新書、2014年、166-172頁をも参照。
- 23 毎日新聞 2014年12月12日付朝刊、13面。
- 24 毎日新聞 2014年12月22日 <http://mainichi.jp/select/news/20141222k0000e040180000c.html>
- 25 中島義道『哲学の道場』ちくま文庫、2013年（原著の刊行は1998年）、244頁。
- 26 高井尚之『カフェと日本人』講談社現代新書、2014年、3頁。
- 27 「日本国内にあるカフェの店舗数は、最新の調査〔2012年時点〕では七万四五四店」で、「五万店超のコンビニの一・四倍」にあたるという。もっとも、「最盛期の一五万四六三〇店（一九八一年）の半数以下に落ち込んだ」とのことなので、現代的な響きをもつ「カフェ」以前に、昭和的な雰囲気の高井「喫茶店」が、いかにこの国に根づいていたのかがよくわかる。高井、前掲書、8-9頁を参照。
- 28 高井、前掲書、214頁。
- 29 曾根泰教ほか『「学ぶ、考える、話し合う」討論型世論調査——議論の新しい仕組み——』ソトコト新書、2013年、34頁。
- 30 同書、36頁。
- 31 同書、70頁。

- 32 同書、72 頁。
- 33 同書、77 頁。
- 34 小林傳司『誰が科学技術について考えるのか コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会、2004 年、i 頁。
- 35 同書、14 頁。
- 36 同書、2 頁。
- 37 小林傳司『『参加』する市民は誰か』、『アステイオン』72 号、2010 年、105 頁。
- 38 W. キムリッカ (千葉眞・岡崎晴輝【訳者代表】)『新版 現代政治理論』日本経済評論社、2005 年、427 頁。
- 39 篠原一『市民の政治学』、岩波新書、2004 年、197 頁。
- 40 マイク・モラスキー『日本の居酒屋文化 赤提灯の魅力を探る』光文社新書、2014 年、28 頁。モラスキーは同書において、「居酒屋はロンドンのパブ、パリのカフェ、マドリッドのバル、ミュンヘンのビヤガーデンなどの飲食文化空間との類似点が見受けられる」(10 頁)としたうえで、日本の居酒屋文化にかんする興味ぶかい考察を行なっている。
- 41 レイ・オルデンバーグ (忠平美幸訳)『サードプレイス』みすず書房、2013 年、6 頁。
- 42 同書、133 頁。
- 43 小宮山宏『課題先進国日本 キャッチアップからフロントランナーへ』中央公論新社、2007 年、12 頁。
- 44 同書、18 頁。
- 45 同書、21 頁。
- 46 広井良典『人口減少社会という希望 コミュニティ経済の生成と地球倫理』朝日新聞出版、2013 年、9-10 頁。
- 47 朝日新聞 2014 年 12 月 14 日付社説「衆院選 きょう投票 『私たち』になるために」。同様の問題意識をもつものとして、宇野重規『〈私〉時代のデモクラシー』(岩波新書、2010 年)を参照。同書において宇野は、「いまの時代において、〈私たち〉を形成することは、ますます難しくなっています」(x 頁)と診たうえで、「〈私〉の不満や不安を、脅威とされる他者への排除へと結びつけないためには、〈私〉の問題を〈私たち〉の問題へと媒介するデモクラシーの回路を取り戻すしか道はありません」(117 頁)と述べている。
- 48 宇野は、「断断された私的問題と公的問題との間の架け橋を回復するために、いいかえれば、政治を回復するために、どうすればいいのでしょうか」と問うたうえで、ジーグムント・バウマンが提示する「領域の三分法」にそのヒントを見いだそうとしている。すなわち、「古代ギリシアにおいては、ポリス(都市国家)の全構成員にかかわる問題が取り扱われ決定される領域としてのエクレスシア(公的領域)

と、逆に家事や家政がなされる場所としてのオイコス（私的領域）とが厳密に区分された」わけであるが、バウマンによると、「その間にもう一つの領域、いわば、『私的／公的領域』としてのアゴラ（広場）が存在した」のであり、「人々をその私的世界から公的な政治機関へとつなぐ回路であるこの領域が、デモクラシーの、そして政治の活性化にとって死活的な意味をもつと考え」られるというのである。その意味でも、哲学カフェをはじめとするさまざまな〈カフェ〉での対話の場は、バウマンのいう「アゴラ」にほかならないであろう。宇野、前掲書、99-102 頁を参照。

- 49 『哲学カフェのつくりかた』の冒頭に置かれている「哲学カフェ Q&A」においては、「どんなテーマがふさわしい？」という問いに対して、「(1) 日常生活に関連すること、(2) 誰もがそれについて考えることができること、(3) シンプルで根本的な問いであること」という3つのポイントが挙げられている。カフェフィロ編、前掲書、xvii 頁。同書巻末の「活動一覧」(323-339 頁)に挙げられているテーマの数々も参照。
- 50 オルデンバーグも「平等化があらゆるサードプレイスの基本的かつ持続的な活動の土台を作る」と述べている。オルデンバーグ、前掲書、74 頁。
- 51 玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安 揺れる若者の現在』中公文庫、2005 年、263 頁。
- 52 オルデンバーグ、前掲書、471 頁。
- 53 アーレントは spectator の態度を「『競技そのものには参加していない』けれど、『希望的かつ情熱的に関与』しているつもりで、競技の行方を見守る人びとの態度」と定義している。Hannah Arendt, *Lectures on Kant's Political Philosophy*, The University of Chicago Press, 1989, p.15.
- 54 Arendt, *Lectures on Kant's Political Philosophy*, p.72.
- 55 Hannah Arendt, *Responsibility and Judgment*, Schocken Books, 2003, p.141.
- 56 Hannah Arendt, *Denktagebuch 1950 bis 1973*, Piper, 2003, p. 569f.
- 57 名古屋での哲学カフェの活動一覧については、以下で確認できる。<http://cafephilo-nagoya.jimdo.com/activities/> イベント一覧/ なお、本段落の記述は以下のコラムを加筆したものである。「対話のあとにランチはいかが？——哲学カフェ@名古屋のつくりかた」、『哲学喫茶瓦版』2014 年 6 月発行
- 58 Arendt, *The Human Condition*, p.199.
- 59 Arendt, *The Human Condition*, p.200.
- 60 *ibid.*
- 61 Arendt, *The Human Condition*, p.201.
- 62 本稿は注で明記したものの以外に、以下の二つの拙論と一部内容が重複している箇所がある。
「哲学への弱い紐帯——中之島哲学コレージュでの哲学カフェ」、前掲『哲学カフェのつくりかた』所収、

55-69 頁、「哲学カフェがめざすもの—— Philosophy To The People ——」、『相山人間学研究』第 9 号、
2014 年、106-125 頁。